

胃 集 団 検 診 (地 域)

動 向

平成14年度住民対象の胃がん検診の受診者数は、16,041名で前年比123名の増加となり、ほぼ前年と同じであった。

県の集計によれば、県域の胃検診の対象人口は約90万人であり現行のカバー率は約7%前後であることを考えると一層の受診率向上が必要である。

受診者数を増加させるためには初診者の掘り起こしが必要であるが、近年受診者の固定化が進んで、その初診率は低迷しており、今後各市町村とも初診者増加対策を練る必要がある。

又、現在がん検診は市町村の単独事業として実施されているが、胃がん検診の有効性は厚生省の研究班により証明されており、住民サービスの低下の無いよう今後益々の受診率向上が望まれる。

一方、協会では神奈川県消化器集団検診機関一次検診連絡協議会の事務局を前年度に引き続き担当し、会の運営に協力している。

方 法

地域における胃がん検診システムは地域医師会と行政の連携により実施されている。予防医学協会是一次のスクリーニングとして胃間接X線検査を担当しており、精密検査は地域医師会の医療機関で実施する仕組みになっている。この方式は多くの地域で集団検診システムとして定着しているが、精密検査の受診率は71.6%で必ずしも高くなく、また前年と比べて若干低くなっている。

現行のスクリーニングの方法は幅100mmのロールフィルムを用いた前壁二重造影を含む7枚法で、造影剤は従来よりも病変の示現能力の高いバリウムを使用している。また透視下で異常所見を疑う場合は適宜追加撮影を行ってより情報量の多い写真を提供できるよう努めている。

1日の撮影実施人数は60人を目標としているが、実施人数は減少傾向にある。また排気ガス規制により検診車を更新しなければならず近い将来機器のデジタル化が進むことが予測される。それに向けて集検、精検のシステムも再構築が必要になって来ると考えられる。

結 果

地域の胃間接X線検査の実施状況を見ると平成8年度から平成13年度は減少傾向であったが、平成14年度では16,041人で123人増加している。発見された胃がんは報告されている限りでは17人(0.11%)で前年度よりも発見率が良くないのは報告状況によるものか現状では把握しきれてない。それ以外には胃ポリープや胃潰瘍などの良性疾患が多く発見されており胃集団検診のメリットは明らかである。今後更に胃集団検診の有効性を認識してもらい一次検診の受診者を増やしていくことが重要な課題である。

表3に地域検診における間接X線の読影結果(疑診報告)を示す。平成14年度の要精密検査者は2,644名、16.5%であった。内容としては胃ポリープの疑いが667名で最も多く次いで肥厚性胃炎の疑い595名、幽門前庭部胃炎の疑い320名と続く。これは確定診断でなく最も疑わしき所見として報告している。

食道精密検査になった人は182人、1.1%で内容としては食道裂孔ヘルニアの疑いが一番多く173人であった。要胆のう造影群、外来受診群はそれぞれ0.6%と0.4%である。

精密検査は19市町村で実施され、その実施状況は表4に示す通りである。精密検査受診率は全体で71.6%と職域に比べるとかなり低い。また市町村別毎にかなりのバラツキが見られる。

胃がんの発見状況を年齢階層別に見ると表5の通りで、胃がんについて見ると40才未満ではなく、加齢とともに発見率が高くなっている。

地域の胃集検の今後の課題としては精密検査の受診率向上と胃集検の有効性を広く一般の方々に認識してもらい、1人でも多くの方々に必要性を認識して頂き一次検査の初回受診率を向上させていくことである。

関係の集計表は75～77頁に掲載